

サトウの日記の1ページ(1867年2月17日)。大坂視察の一行の写真がそえてある。サトウは前列左端。(PR030/33/15/2)

開港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY

●編集・発行／横浜開港資料館
 横浜市中区日本大通3 〒231
 電話 045(201)2100
 ●発行日／昭和60年11月1日
 ●印／(有)三信印刷所

収蔵資料の紹介

アーネスト・サトウの文書と著作

サー・アーネスト・M・サトウは、『外交官の見た明治維新』の著者としてよく知られている。今回は、『幕末のイギリス外交官アーネスト・サトウ』展にちなんで、当館所蔵のサトウ関係の資料を紹介しよう。

幕末維新の歴史に関心のある人ならば、サトウの名を知らない人はいないだろう。伊藤博文や西郷隆盛ら幕末政局の鍵をにぎった人びとと接触し、情報収集に日本中を駆けめぐった活躍ぶりは、サトウ自身の回想録『外交官の見た明治維新』にも十分うかがえる。そのサトウ関係の資料といえは、まずあげなくてはならないのが、イギリス国立公文書館 Public Record Office に所蔵されているサトウ文書 Satow Papers である。これは、サトウの没後、その遺志により同館に寄贈されたもので、公文書、書簡、日記、覚書などから成る膨大な文書類である。なかでも圧巻なのがサトウの日記であろう。これは、一八六一年一月から一九二六年一月まで六五年間にわたって書き続けられた四五冊の日記帳である。通訳生として極東へ旅立ったときから、死亡する三年八カ月前までにあたる。

『外交官の見た明治維新』はこの日記をもとに書かれた。また萩原延壽氏がやはりこの日記を土台として『遠い崖 アーネスト・サトウ日記抄』を朝日新聞夕刊に連載中であることをご存じの方も多いだろう。

サトウ文書には、このほかに、駐日公使時代の公文書、アストンやデイキンズあての書簡など、日本関係だけでも興味深い資料が多数ふくまれている。当館では、このサトウ文書のなかから、日記全体および日本関係の部分マイクロフィルムで収集している。このうち、サトウ日記はすべて複製本にして閲覧室で利用できる。そのほかについても、現在、複製化をすすめている。

サトウはまたアストン、チェンバレンとならんで明治時代の代表的日本学者としても著名である。その研究の対象は驚くほど多岐にわたる。語学書、日本の史書の

翻訳、旅行案内書、キリシタン本

の研究、アイヌ研究……し著作の幅も広い。これは、サトウ自身の知識欲や、日本研究がまだ未開拓の分野だったという事情もさりながら、外交官としての情報収集活動の副産物という側面を抜きにしては理解できないだろう。

サトウががつぎつぎと研究の成果をあげたのは、明治期にパークス公使のもとで日本語書記官をしていた時期である。パークスは部下たちに日本についての調査研究を奨励した。サトウやアストンらの業績もそうした土壌と無縁ではない。

当館のブルーム、ドン・ブラウン両コレクションをあわせると、サトウの著作のほとんどがそろそろ数点であるがサトウの蔵書票のついた旧蔵書もある。サトウは、「チャイニーズ・アンド・ジャパニーズ・レポジトリ」誌、「フイーニックス」誌、「日本アジア協会紀要」などに精力的に寄稿しているが、それらもそろそろいる。ジャパン・ウィークリー・メール紙にまず掲載され、のちに「日本アジア協会紀要」に収録されたり、本になったものも多いが、このメール紙も複製でそろっている。

なお、本誌の第七号では、館長対談に萩原延壽氏をむかえて、サトウについて語っていただいた。また、サトウのプロフィールや旧蔵書などの関連記事もあるので、参考にしていただきたい。(伊藤

館長対談

「アーネスト・サトウの孫」
武田澄江さん・林静枝さん

御姉妹を迎えて

館長 本日はイギリス外交官アーネスト・サトウのお孫さんにあ

られます武田澄江さん、林静枝さん御姉妹にお越しいただきました。横浜開港資料館ではこの十一月三日から特別展示として「幕末のイギリス外交官アーネスト・サトウ」展を企画しており、武田家からサトウの遺品の数々を御出陳いただきことになっております。

アーネスト・サトウは幕末維新期の外交に深くかかわっており、また日本学者としてもよく知られております。サトウにつきましても、現在『朝日新聞』紙上で萩原延壽さんが「遠い崖——サトウ日記抄——」を連載されており、第一巻はすでに刊行されています。このたびのサトウの遺品の展示も萩原さんの御斡旋をいただいたわけですが、萩原さんの下で資料調査にあたっておられます吉良芳恵さんにも本日御同席していただきました。

祖父・サトウと祖母・兼

武田澄江 祖母の部屋に祖父の写真が飾ってあったことを憶えております。ですけど子供の時にはその写真がサトウであるとは知りませんでした。父はわたしたちに何も話してくれませんでしたので、ですから祖父・サトウについては、大きくなってから、本で読んだり、他の方から伺ったりしたことになってしまいます。

わたしが生まれた時、祖父は、長女を早くに亡くしておりますので、ですから大変喜んでくれています。三歳になったらイギリスに来るよ



祖父・サトウ

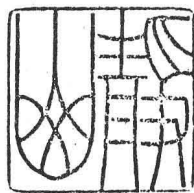


祖母・武田兼

うにと言って寄こしたようです。けれども、その前に祖父は亡くなつてしまつたものだから、本人に会う機会は一度もありませんでした。もう少し長生きしてくれていましたら、わたしの人生も大分変つていたことになっていただしようけれども。

祖母については、添寝をしてくれたり、靖国神社へ散歩につれていってくれたり、庭の草採りを一緒にしたり、初孫だったこともありましようが、自分によく似ているといつてかわいがつてくれました。亡くなったのは昭和七年(一九三二)ですが、腸捻転だったせうで、おなかがいたいといつて苦しがつていたことを記憶しております。几帳面できびしいひとでしたけれども、わたしにとつては優しいおばあちゃまでした。

林静枝 わたしの名前は祖父の号である「静山」から一字をもらつ



サトウの落款

ています。わたしは小さかつたものですから、祖母が亡くなつた時に大勢の方がお見えになつたことをうつつら記憶しているくらいです。

館長 その時は九段の富士見町の

お宅ですね。

林 はい。父が二歳の時、ですから明治一七年(一八八四)になりました。もう少しか、飯田町から富士見町に移つたそうです。

武田 富士見町の家は、旗本のお屋敷で、わたしたち姉妹もそこで生まれ育ちました。広いけれども大変住みにくい家でした。もう一つ、女中部屋を浴室に改造したり、ガラス戸を入れたりして手を加えてはいましたけれども。

林 とはいいいまでも天井が高いものですから冬は寒い家でした。武田 わたしたちがストロブをい

たいといつても、父は天井裏の鼠が喜ぶだけだと。

館長 富士見町のお宅には洋間がございましてでしょうか。武田 わたしたちが小さい時は応

接間以外は日本間でした。父の時代に絨緞を敷いて洋間風に使つたり、戦後になってわたしたちのために洋間を造つてくれましたけれども。祖母の想い出といえは、一人トランプをよくしていたのを憶えています。昔のいろいろなトランプ

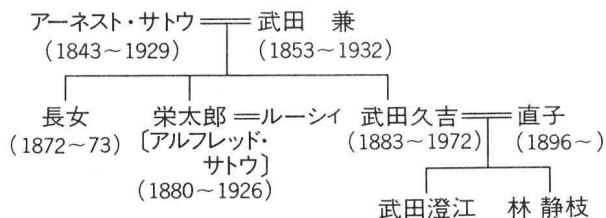
がたくさんありました。

林 トランプばかりでなく、ドミノやチェスなどのゲームも。武田 祖母は、夏でも着物と足袋をきちつと身につけていて、そういった面ではきびしい人でした。お手伝いさんがなかなか居つかない程でして、そのぶん母が苦労したのでしようけれど。

館長 おじいさま、おばあさまにつきましてはおいおいふれていただくことにしまして、おとうさまの武田久吉さんについてですが、久吉さんは植物学者として高名な方でございますが、それとともに日本山岳会の創立メンバーでもあり、その創立の会合が横浜のオリエンタル・パレス・ホテルで行われたということでは、横浜との縁もあるわけです。

サトウの子供たち

武田 祖父と祖母は、長女を一歳で亡くしています。明治一三年(一



武田家系図

八八〇)生まれの長男・栄太郎は、
 学習院で大正天皇と同学年だった
 ようです。祖父は明治三三年(一
 九〇〇)栄太郎をイギリスに呼び
 よせていますが、自分は駐清公使
 (二九〇〇—〇六)として赴任
 します。栄太郎が結核にかかっ
 たのですからアメリカに転地療
 養させています。栄太郎はそのま
 まアメリカで奥さんをもらって、
 アルフレッド・サトウを名乗り、
 デンバー近郊のラ・サルで農場を
 経営していたとことです。結局
 イギリスからアメリカに渡ったま
 ま一度も帰国することもなく大正
 一五年(一九二六)亡くなってい
 ます。祖父は駐清公使を最後に外
 交官生活から引退して帰国する途
 中、日本に寄って祖母に、そして
 アメリカで栄太郎に会っています
 が、それが最後だったでしょう。
 母から伝え聞いたところでは、と
 ても優しい方で、祖父は栄太郎の
 ことを大変かわいがっていたそ
 うです。

父の久吉は、次男として明治一
 六年(一八八三)飯田町の家で生
 まれています。

吉良芳恵 サトウの書簡のなかで
 ヒサキチとなっているのがありま
 すが、ヒサヨシとどちらが正しい
 のでしょうか。

林 ヒサヨシですけれど。

館長 キチは愛称でもありますか
 ら、あるいは小さいころにはヒサ
 キチと呼んだことがあったかもし

れませんか。おとうさまの経歴を
 簡単に御紹介ください。

父・武田久吉

武田 父は富士見小学校から府立
 一中、東京外国語学校へ進学して
 います。一中のころから植物研究
 を志して、牧野富太郎先生の教え
 を受けていたようです。



栄太郎と久吉

館長 外国語学校では何科ですか。
 武田 ドイツ語科です。言葉に対
 してはたいへんうるさい人でした。

わたしたちの日本語のアクセント
 や文法がおかしいといつて直させ
 ますし、日本語になった英語の、
 たとえばセーターはスウェーター
 と発音しなければいけないと。漢
 字でも辞書を手元に置いておいて
 いちいち確かめますし、受けとった
 手紙の誤字を訂正して送り返すこ
 ともししていました。

吉良 サトウと同じですね。

館長 今回の展示で拝借する遺品
 のなかに、サトウが久吉の英文の
 手紙を添削したものがありますね。

武田 とにかく言葉の面では厳格
 でしたね。「とつても」とか「す
 ごい」とかいいますと、そういう
 言葉は正しい日本語ではないとい

つてよく叱られました。父が亡く
 なってからわたしたちの日本語は
 だいぶ乱れました。

父は、それから、明治四三年(一
 九一〇)イギリスに留学しまして、
 王立キユウ植物園、王立理工科大
 学、パーミンガム大学で植物学を
 学んでいます。その留学時代に、
 週末になると祖父のところを訪ね
 て一緒に植物採集を楽しんだよう
 です。

吉良 サトウの書簡には植物の名
 前がラテン語でよくできますし、
 植物を話題にしていることも多い
 ですね。

館長 サトウの影響も強くあった
 のでしょうね。山岳会については
 いかがですか。

武田 あまり知らないんですよ。
 わたしたちが小さいころ、今夜は
 サンガクカイで遅くなるというこ
 とはよくあったのですが、それも
 三学会と思いきんでいたくらいで
 して。

館長 山岳会は、日本アルプスの
 紹介で有名なウェストン(Walter
 WESTON)一八六一—一九四〇)
 が、明治三八年(一九〇五)横浜
 のオリエンタル・パレス・ホテル
 に武田久吉さん他、小島鳥水、岡
 野金次郎、城数馬、高野鷹蔵、高
 頭仁兵衛の六名を呼び集めて設立
 を促したということで、このうち
 小島と岡野が横浜の人なんです
 ね。武田さんと小島鳥水とで機関誌
 『山岳』の編集にあたられているの

ですが、この方たちの名前をお聞
 きになられたことはございますか。

武田 高野さんは鳥の研究家です
 て、父に連れられてお宅に伺った
 ことがあります。家にはたくさん
 鳥がいて、大きな本が書棚に並べ
 てあったことを憶えています。

林 山へは父によく連れていって
 もらいました。

館長 どのあたりの山ですか。
 林 富士山とか八ヶ岳、谷川岳。
 尾瀬にはよく行きました。

武田 わたしが尾瀬につれていっ
 てもらった最初は昭和十七年(一
 九四二)その頃はまだ木道がな
 くて地下足袋にわらじでしたね。

館長 おとうさまの服装は。
 武田 ゲートルを巻いていました
 が、靴は銀の打つてあるもので、



左から、林静枝、武田澄江、吉良芳恵の各氏と遠山館長

リュックは誂え品でした。胸のポ
 ケットから白いハンケチをちよつ
 と出して、英国風の登山スタイル
 なんです。そのハンケチは
 祖父のもので、E・Sのイニシヤ
 ルのはいったものが何枚もありま
 した。

林 父は山歩きの道々で植物や昆
 虫の名前を覚えてくれまして、そ
 のお陰でわたしは自然科学が好き
 になりました。

武田 父がわたしたちを山に連れ
 ていくのは、写真を撮る時の助手
 代わりなのね。

林 写真を撮る時は、まわりを全
 部きれいに掃除させて、少しでも
 風があると止むまで待っています。
 富士山の写真でも雲が流れ去るま
 でシャッターを押しませぬし。

武田 そのくせ足は速いんですよ。
 写真を撮って片付けている間にわ
 たしたちは先に行っているのです
 けれど、すぐに追いつかれてしま
 って。

吉良 サトウも健脚だったようで
 すよ。旅行の時の日記を読んでも
 ますと、行程を追うだけですが、日
 が疲れてしまうくらいですが、日
 記の中に疲れたという記述はほと
 んどみあたりませぬ。

館長 足の速さもサトウ譲りなん
 でしょうね。おとうさまの家庭で
 のお人柄はいかがですか。

武田 先程の言葉づかいのことも
 そうですが、正確でない感じがす
 まないのね。わたしたちが小さい

時、折紙を折っていると、自分でも折ってみて一枚として正確な正方形の折紙がないといって怒るんです。

林 写真を撮った後のメモも一齣ごと正確に記録をつけていました。そういった几帳面なところはありますが、自分の機のまわりはいつも雑然としていて、しよつ中ものを探すために生まれてきたみたい。

館長 おとうさまの御趣味は。

武田 クラシックのレコードがたくさんありました。室内楽のコンサートにもよく連れていってもらいました。

林 わたしたちはバイオリンを習わされました。

吉良 サトウはピアノですよ。

林 ピアノはうるさいからダメだつて。子供も大声をだすから大嫌いだ。

館長 政治外交面の御関心は。

武田 新聞はよく読んでいました。太平洋戦争のときには、「日本は馬鹿な戦争をする、敗けるにきまつている」と。そのわりに八月五日の日記には、「日本がポツダム宣言を受諾した」とたった一行しか書いていません。

サトウの遺品

館長 ところで、今回の「サトウ」展で、愛用の火鉢、箱根の奇木細工の文机、サトウからの家族宛の書簡などを拝借して展示させてい

ただくことになっていくわけですが、それらの由来についてお聞かせください。

林 父は話してくれたことがありませんで、納戸にしまつてあつて目に触れるところには置いてありませんでした。やたらに見るものではないと。父が亡くなりまして、今の善福寺の家に移る時に、荷物の整理をして母からいろいろ説明を受けました。書は、もともと祖父の写真とともに祖母の部屋に掛けてありましたが、とても上手な書でしょう、日本の方のものばかり思っていました。

武田 手紙はいろいろ遺つていますが、祖母は英語ができませんし、お互い遠く離れて暮らしていたわけですから、本当のところの祖母の心気はどうだったのかと思うことはあります。

館長 昔の人は感情を表に出すというのをしませんからね。

吉良 サトウの手紙を読ませていただいているのですが、ローマ字で「Koshiki Okane San」とあつたり、久吉さん宛のものには、おかあさんを大事にと、最初か最後に必ず一行ありますね。そういう家族もかえつて素敵だなあと思えますね。

武田 遠く離れていたからこそ手紙がたくさん遺つたということはありませんね。普通の家庭では家族の手紙などありませんもの。その意味では大変感謝しております。

吉良 それから兼夫人の和服姿の写真を拝見しますと、必ずサトウからのプレゼントの帯留めをつけていらつしやいますね。

武田 ダイヤモンドのまわりに真珠をあしらつたもので、サトウのネクタイ・ピンを帯留めにしたと聞いています。今は母がもらい付けて大事にしています。

吉良 サトウは外交官としてクールで厳格な面がありますけれど、一方で子煩悩なところが手紙ではよく窺えます。

館長 久吉さんは柳田国男と親しくし、民俗学の研究もされていきますね。この点でも日本学者として日本の文化の研究と紹介に力をつくされたサトウの影響を感じます。

本日は武田家のお話を伺い、久吉さんまた御家族との関係を通して、サトウの人柄を推察できる貴重な資料をいただきました。サトウの外交官としての公的な面は、彼の回顧録『一外交官の見た明治維新』(岩波文庫)や石井孝さんの『明治維新の舞台裏』(岩波新書)、また萩原延壽さんの研究で明らかにされています。今日のお話にも参考をひろげること、外交史の研究は一層深まるであろうことをあらためて感じました。長い時間お話いただきましてありがとうございます。

(九月六日の対談です)

明治の瓦斯管

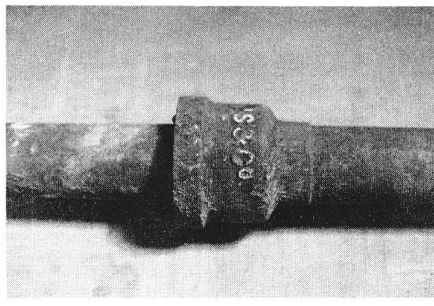
昨年末、日本大通りの下水道工事現場において、路面下約二メートルの深さ、太田町方面から山下町方面へむけて日本大通りを斜めに横断する位置から長さ約九メートルの鑄鉄管が発掘された。内径七五ミリのいわゆる三インチ管、九フィートのもの三分分で、この発掘箇所にも水道管敷設の記録が見当たらないことから瓦斯用鑄鉄管と判断された。

『横浜瓦斯史』(昭和一八年刊)をひもとくと三三六頁に「太田町の布設管廃棄」の項がある。

明治二十三年十一月十六日の夜、太田町一丁目の街燈、需要家の燈火とも消滅したため、原因を調査したところ、布設二吋管の或部分が腐蝕し或ひは毀損して地下水が瓦斯管に充滿して瓦斯を閉塞してゐたのであるが、同地は二回に亘つて地揚げしたため瓦斯管は地下深く埋没して修理困難なのでこれを廢棄し別に假管

を設けて瓦斯供給を繼續した。「二吋管」は同書口絵の「明治三十年頃の横浜及び瓦斯燈分布図」に三吋管で図示されていること、太田町の続きであること、「地下深く埋没」していたことから、発掘鑄鉄管は明治五年(一八七二)創業時の瓦斯管である可能性は極めて高い。

ところで、この鑄鉄管のソケット部分には「J&C」の陽刻印がある。時代は新しくなるが『英人貿易名鑑』(大正二年刊)の鉄管メーカーに「John Shaw & Co, Glasgow, Scotland」がある。参考にはなろう。現在この発掘鑄鉄管は一本分が日本鋼管(株)において成分分析に供されている。追つて結果報告をすることもできよう。(良)



『ペドラー・コレクション 絵葉書にみる震災前の横浜風景』 展余話

あいつく寄贈・寄託

前号でも述べたように、当館所蔵絵葉書のうちには、市民の好意によって寄贈されたものも多い。一件毎の点数はわずかでも、その集積のなから、震災前の横浜の風景や市民の表情、さまざまな記念行事の景況が蘇ってくる。まず展示期間中に寄せられた寄贈・寄託資料の紹介から始めよう。

中区新山下にお住まいの庄堂修氏より九点。市役所の前を市電が走っている大正初期頃の着色絵葉書等。熱海の軽便鉄道も珍しい。相模原市の宮本清氏からは、震災と復興記念大博覧会の実況を伝える絵葉書を中心に三十点。伊勢佐木町で「港寿司」を経営されていた先代の友次郎氏の遺品である。

鎌倉市の吉岡小三郎氏より十一點。日本郵船大洋丸の「御乗船記念絵葉書」、二代目横浜駅や本牧十二天の美しい着色絵葉書等。後者はマーシャル・マーティンの親類にあたるジャコブス氏より譲られたものという。吉岡家は震災まで元町で質商「上総屋」を営んでおられた。

ペドラー氏からは、さらに二度にわたって計百点に近い追加の寄

展余話

託があった。太田町通りや岡村天神大鳥居、別所の桜、グランド・ホテル内部の光景等は大変珍しい。東海道線平沼付近や日枝神社境内の雪景色は美しい。市内各地の風景を、さまざまな意匠をこらして記録しつづけた横浜の絵葉書屋さんと、それを丹念に収集しつづけておられるペドラー氏の努力の双方に、改めて感銘を受けた。

横浜の絵葉書屋さん・余話

—カール・ルイスのこと—

今回の展示をきっかけとして、横浜の絵葉書屋さんの御子孫が名乗りを挙げられ、資料や逸話が掘り起こされるのではないかと、淡い期待は、残念ながら不発に終わった。しかし、沢護氏より「絵葉書に学ぶ(七) —絵葉書とカール・ルイスのこと—」(「スタンプブリーダー」一九七八年十一月号)という論稿をいただいたので、紹介しておこう。

氏の論稿によると、ルイスは若い頃仕事に失敗して、サン・フランシスコで牛乳屋の配達夫をしていたという。その後船乗りとして二十三年間働き、明治三十五年來浜、山下町百三十六番Dに写真館

を開業した。時にルイス三十七才であった。四十年百二番に移転するまでの五年程の間に二千数百種の絵葉書を製作したことが知られる。経営状態はあまり芳しくなかったよう、大正初期には店を手放し、セール・フレイザー商会の自動車部門の支配人になった。上大岡に住み、日本女性と結婚していたらしい。最後はスパイ容疑で特高に捕えられ、箱根の収容所で病死したという。享年七十才、横浜での生活は約四十年に及ぶ。

前号の「館長対談」のなかで、リナ・デンチンさんや中西道子さんが語っておられたように、戦争が居留外国人に与えた傷跡はきわめて深い。これもその悲惨な一例であろう。

ルイスが製作した絵葉書のうち、今日見ることのできるのはほんのわずかだが、水兵のマンガもの、日本の風俗や女性を写した写真等に特色があり、風景写真は乏しい。ペドラー氏から追加寄託を受けた絵葉書のうちに、ルイス製作のものが二点含まれていたが、いずれも遊郭の光景を写したものである。

展示をご覧になった方々の感想のなかで最も多かったのは、やはり着色の美しさにふれたものであった。横浜の絵付師達について、もう少し詳しく述べてみよう。

横浜の絵付師達

影や、鶏卵紙焼付け写真に着色を施したアルバムの製作で名高い。明治三十年代、ここには三十名程の日本人職工が働いていたが、そのうち約十名が「Painter」すなわち絵付師であった。その技術を生かして「薩摩」と呼ばれる鹿児島産の陶器の絵付けや絵葉書の製作を余業としたのである。

逆に美術商のクーン・コモル商会の場合は、陶器の絵付けの方が本業で、写真アルバムや絵葉書の製作は余業であった。

いづれにせよ、幕末期から大正初期にかけて、横浜にはかなりの数の絵付師がおり、さまざまな輸出用工芸品の製作に従事していたのである。

「横浜絵」といって、今はもつ

ばら横浜浮世絵の呼称となったが、かつては五姓田芳柳一派の輸出絵や写真絵のことをこう呼んだらしい。前者は日本の風俗を、後者は外国人の依頼でその肖像を、絹地に淡彩で描いたもので、明治初期に盛行した。芳柳門下のひとり、平木政次によると、安手のものを「ドコマクリ」といって、「絵端書同様のもの」であったという。手軽に買える美術品という意味であろう。横浜絵の作者のひとり松本楓湖は、アーレンス商会の注文を受け、輸出七宝焼の下絵を描いて高収入を挙げ、浅草栄久町に家を買ったと伝えられている。「青木茂

「横浜絵—明治洋画・五姓田派—」

〈郷土神奈川〉八号)による。また、芳柳の二男・義松は洋画の先駆者として名高いが、「横浜市史稿・風俗編」によると、その師ワグマンの二子・小沢一郎は写真彩色を余技としたという。

洋画の歴史の上からいって、横浜はその揺籃の地としての栄誉を得るにすぎないし、芳柳一派の和洋折衷画は、やはり過渡期の産物であって、本格的な洋画や近代日本画の歴史は、舞台を東京に移して展開する。しかしそれとは別に、横浜絵は輸出用工芸品の製作技術と結び付き、陶器や写真や絵葉書の絵付師達の技術のなかに取り入れられたのではないか。そうだとすれば、横浜絵葉書もまた横浜絵の傍系の子孫だということになる。これはわたしの確証なき確信である。(京藤多喜夫)



絵葉書屋さんの店頭風景(元町2丁目の上方屋)

資料よもやまばなし

幕末から明治初年の横浜の町と住民

— 残された手紙から —

横浜開港資料館には横浜の歴史を明らかにする膨大な史料が所蔵されている。その中には、昔の人が書き残した手紙が多数含まれている。これらの手紙には、公文書からは知ることができないような興味深い事柄が書かれている。そこで、ここでは幕末から明治初年にかけて横浜で書かれた手紙を紹介し、古い手紙を読む楽しさを味わっていただくことにしよう。

まず一番目の手紙は、万延元(一八六〇)年七月に書かれたもので、筆者は外国奉行鳥居越前守の家臣であった林勇右衛門という人物である。彼は主人に従ってたびたび横浜に出向き、開港当初の横浜の様子を手紙に認め知人に送った。ここに紹介する手紙はその中の一通で、当時の横浜の生活環境について述べたものである。

度の食事も余程心付不申などは相成不申、夜中其蠅相付困入候、水至て悪敷、塩気は無之候得共、田の中へ堀井戸鉄気強く、夫故石・砂沢山御先方へ御入の処、同様宜敷無之に付、又々御石出し、猶又深く御掘らせ相成候得共、同様にて、井際は八、九尺候得共、右井戸より出し石一日の内赤さび申候、御庭廻り水仕候砂利真赤にてさび、右の水故、腹張困り入申候、風呂入・朝の顔洗候ても誠に染顔中ひりひり痛申候、

この手紙から、当時の横浜には非常に蠅が多かったことがわかる。彼は毎日二、三百足の蠅を打ち捨てていると述べ、食事の際にも蠅が茶碗に飛びこみ、ゆつくり食べていられないと報じている。また、飲料水については鉄分が強く、飲むと腹が張って困るとあり、この水で顔を洗うとひりひり痛むとも書かれている。

述べている。

「誠に御当港は穩にて何にても別条も無之、世間附合又は近所に何様の義有之候ても何にても差構無之、兎角面倒筋無之、至極御弁利にも相成可申哉、(中略)尤御府内とも違ひ御案内の通り地狭の処に御座候得共、隣しらすにて日々御遊参にても被遊候は、御尊躰の御為にも相成可申哉奉存候、」

この手紙には、横浜では面倒な世間づき合いがないので住みやすいと書かれてある。さらに、彼は横浜と江戸とをくらべて、横浜は江戸より狭いにもかかわらず、隣しらす」と隣に誰が住んでいるのかも分らないことがあると述べている。このような現象は、横浜に古くからの共同体が存在しないことによつて引きおこされた。横浜は安政六(一八五九)年の開港以前には小さな農漁村にすぎず、開港後の住民の大部分が他所から移住した人々であった。そのため、古くからの町とは違つて住民相互のつき合いは極めて希薄であつたと思われ。彼はそのような生活様式を好ましいと述べているが、そこには現在の都市生活者と同様の意識をみる事ができよう。

西欧文化にふれ、その驚きを郷里の人々に手紙で伝えた。ここでは彼の書いた手紙のいくつかを要約して紹介する。

まず食生活に関するものからみていこう。彼は、明治四(一八七二)年一〇月、郷里の嫁に牛肉のみを漬を送つた。荷物に同封された手紙には「誠に牛は宜敷(中略)至極薬に相成」と横浜では牛肉を薬として用いているとある。さらに、孫娘が牛肉を食べるようになつてから太つてきたことや牛肉が大好物になつたことが書かれている。次に牛乳については、明治四(一八七二)年二月の手紙に「乳不足に候は、牛の乳もこれあり、浜表の小兒牛の乳にて育て候者多分御座候、誠に薬にて大丈夫に育ち候」と書いている。つまり、母乳の不足している女性に牛乳を利用することを勧められているのである。また、横浜では牛乳で育てられた子供が多数いると述べている。

第二は風俗についてであるが、彼は明治四(一八七二)年一月に「ざんぎり頭」の流行を手紙に記している。そこには「浜表・東京追々男女共、かみを切候」と横浜や東京では「ざんぎり頭」が一撒的になつてきたと書かれている。彼の孫娘も「ざんぎり頭」にしたよう、孫娘の髪型について「ざんぎり切に致候かたよろしく」と報じている。

初的女子留学生が渡米することを知つた時の驚きを記したものである。この時、渡米したのは津田梅子ら五名の女性で、日本の女子教育制度確立のために外国に派遣された。さて、明治四(一八七二)年一月の手紙には、女子の留学について「誠におもしろきよがらに相成」と感想が記されている。さらに、彼は「やまとめぐりよりころやすく相成」と国内旅行より洋行の方が簡単になつたと述べている。つまり、彼はさまざまな西欧文化との出会いを通じて、西欧を極めて身近なものと感じることができるようになつたのである。以上、三人の手紙を紹介した。手紙は発信者と受信者の二人だけが見ることができものであるため、そこには発信者の本音が語られることが多い。また、書かれていることも、日常生活を題材にしたものが多いといえる。つまり、歴史の中で最も分かりにくい部分、手紙によつて明らかになることも多いのである。筆で書かれた手紙の文章は大変読みにくいものであるが、本稿をきっかけとして当館所蔵の手紙の利用が増えれば幸いである。

(本稿を作成するにあたっては、群馬県勢多郡新里村の吉田幸治氏所蔵の文書を利用した。なお、当館家文書の複製は、横浜開港資料館が所蔵している。) (西川武臣)

最後に紹介する手紙は、日本最

横浜人物小誌 9

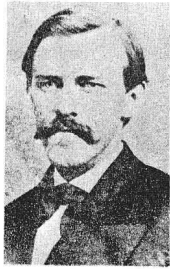
日本研究者の「横浜ゆき」 W・E・グリフィス

Yatoi という英語がある。日本語にうつしかえると、ヤトイつまり「お雇い外国人」の意味あいになる。

話は単純である。本来、日本で使われていた「お雇い外国人」という言葉が、翻訳されたにすぎなかったからである。

明治初年、『御雇外国人一覽』(明治五年三月)が出版されたことからもわかるように、そのころ日本政府は数多くの外国人を雇いはじめていた。いうまでもなくそれは、日本の「近代化」を達成するためである。最盛期は、一八七〇年(明治三)から一八八六年(明治一九)の時期、とくに一八七四年度の政府雇の外国人、八五人がピークであった(H.J. Jones, Live Machines)。日清戦争時にいたると、その数は七〇名余に激減する。ほぼ明治二〇年代で、お雇い外国人の役割は終わったといえよう。

ところで、このような「お雇い外国人」の歴史的意義について、いったい誰がはじめて注目したのであろうか。



来日ころのグリフィス (福井市立郷土歴史博物館蔵)

うか。

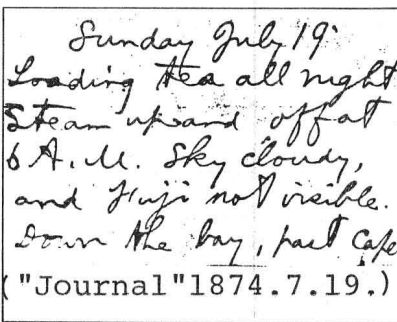
さて今までグリフィスといえは、福井か東京での、お雇い教師にかかわって、おおいに語られてきた。彼の日本滞在を考えてみると、当然のことである。お雇い教師として、福井に一年弱(一八七一年三月〜七二年一月)、東京に二年半

強(おもに七二年二月〜七四年七月)、それぞれ滞在したからである。だが、グリフィスの行動を少し追いかけてみると、福井と東京からの視点のみでは不十分であることに気づく。ことに、東京滞在中彼は足繁く横浜に通っていたのである。わたくしの調査によれば、グリフィスはおよそ、一二〇日余横浜に逗留している。彼の日本滞在に占める割合は一割。訪問回数にして、七〇回弱である("Journal of W. E. Griffiths" by R. Kept in Rutgers Univ. Lib.)。このように検討してみると、グリフィスの横浜について、語ることは許されるであろう。

まず、一八七〇年(明治三)二月二十九日、彼は福井藩のお雇い教師として来日。横浜居留地に住むアメリカ人宣教師が出迎えるなか、横浜に上陸する。「攘夷」の国「日本に着いた時、護身用のピストルを携えて来たことはもちろんである(W. E. Griffiths, Verbeck of Japan)。来日一ヶ月たつたに、地震を初めて経験したのは、居留地三九番のヘボン邸においてである(W. E. Griffiths, Hepburn of Japan)。彼の日記によれば、「およそ三〇秒続いた」とある(一八七一年二月十九日の条。初めてにしては、たいして荒れた様子はなかった。ささいなことである。その後、しばらく福井に滞在するが、その際ヘボン博士から日本語訳の福音書原稿のコピーをもらう。福井でバイブル教室を開くことができた。横浜居留地に住まうアメリカ人宣教師の存在は、そのちも、グリフィスにとって頼もしかった。ブラウン、バラ、ブリーニン夫人などである。一八七二年(明治五)二月、ふたたび東京に住み始める、グリフィスは授業の合間に「横浜ゆき」を何度も、試みた。(1)仕事、(2)教会宗教活動、(3)研究、のためである。詳細に論ずることはできないが、彼がのちに日本研究者・宣教師として出立するのを見ると、グリフィスの「横浜ゆき」はきわめて重要な意味をもつてくる。

一八七四年(明治七)七月十九日、横浜港から帰国の途につく。従来の研究史では、グリフィスの帰国日は一八日とするが、それは乗船した日である。彼の日記によると(写真参照、乗船したコロラド号が横浜港を出港するのは「一九日」である。コロラド号は当初、サンフランシスコに向って、二〇日(月曜日)に出港するはずであった(The Japan Gazette, 17 July 1874)。だが、何かの都合で、一九日(日曜日)の夜明け、午前六時に出港した。日記によれば、グリフィスが乗船してからも一晩中、茶の積み込みが行われていた。当時、茶の輸出先はほとんど、アメリカであったことを考えると、「横浜市史」三巻上、その活気たるや、想像にかたくな。グリフィスは帰国に際し、荷積みの喧騒さと感傷のあまり、深い眠りにつげなかったであろう。ちなみに、パナマ経由でニューヨークまでの運賃(一人は三〇〇ドル、大陸鉄道を使うと、三三〇ドルである(The Japan Gazette, op. cit.)。なお、グリフィスは、最初の日本研究書である The Mikado's Empire (1876)のなかで、まっ先 E. M. Satow に感謝を捧げている。しかし、彼の日記に、サトウの名前はない。なぜであろうか。アメリカ人宣教師の頻度に対して、有能なイギリス公使館員はほとんど姿を現さない。ただ、一八七三年二月二十八日の条に、パークスとともに「ひさ」という人が登場する。この人物が、サトウかもしれないのである——

(内海 孝)



("Journal" 1874. 7. 19.)



『幕末のイギリス外交官アーネスト・サトウ』展

政府から感謝状が贈られています。

こうした幕末の外交官としての活躍のほかに、日本学者としての著作活動や日本の家族との姿も紹介しています。サトウは数多くの著作を残していますが、その知識

その人物像と時代をうかがいあがらせつつあります。

今回の展示は、このサトウが主人公です。彼や彼をとりまく人々の文書や日記、手紙、著書、写真などによってその足跡をたどろうとするものです。

サトウには一八歳で日本に向けて旅立った時から亡くなる数年前まで、六十五年間の長きにわたって書き綴った日記があり、時代の貴重な証言にもなっています。展示ではこの日記の一部を複写で

際し、各層の日本人が残した記録を通して、当時の人々の対外認識を探究。

▼展示記念講演会(講堂) アーネスト・サトウをめぐって 講師・萩原延壽(歴史家)、藤田省三(法政大教授) 11/24(日) 13時30分~16時30分 聴講料三〇〇円 定員一〇〇名先着順

▼秋季特別講演会 『アメリカ史のなかの横浜開港』 猿谷要(東京女子大教授)、片翼だけの青春〜ハマの思い出 生島治郎(作家) 11/9(土) 13時30分~16時30分 会場・中区万代町一〜一教育文化ホール 入場無料 申込11/15から往復ハガキで 中区日本大通3 横浜開港資料普及協会あて(先着五〇〇名)

▼講座(講堂) (1)『横浜とガスの一〇〇年』(10/31~11/10) (2)特別展示『幕末のイギリス外交官アーネスト・サトウ』(11/13~1/29) 後援・朝日新聞社 (3)企画展示『黒船絵巻と瓦版』(2/1~4/23) ベリー来航に

すが紹介しています。

幕末期 日本語が流暢であったサトウは、若き日の伊藤博文や井上馨、木戸孝允あるいは西郷隆盛といった幕末の重要な人物たちと

頻繁に接触し、政局を論じることによって特異な存在として知られていました。この活躍を物語るものに、たとえば慶応三年(一八六七)の西郷から大久保利通あての書簡があります。サトウに会い、

(1)横浜市史講座後期「開港期の横浜」10/12・26 『日記と手紙にみる幕末・明治の日本と横浜』西川武臣(館員)、11/16・30 『開港期の横浜外国人社会』秋本益利(横浜市大教授)、12/14・1/18 『横浜商人と商権回復運動』井川克彦(館員)、2/8・22 『近代日本憲政思想の歩み』佐藤孝(館員)、3/8・22 『横浜居留地もののはじめ』斎藤多喜夫(館員) 13時30分~15時 定員八〇名受講料四五〇〇円(講座一回九〇〇円)

(2)古文書を読む会〜市内地方文書に親しむ(開講中) 講師・内田四方蔵(郷土史家) (3)資料講読会〜オールコックの『大君の都』を読む(開講中) 講師・石井孝(津田塾大教授) 問い合わせ 横浜市中区日本大通

▼寄贈資料(七月~九月) (1)横須賀製鉄所製六角煉瓦1点 (東京都大田区大槻貞一氏) (2)灯台用竹内仙太郎製造煉瓦1点 (三重県志摩郡竹内富士雄氏) (3)本覚寺山門木彫彫刻一対2点 (神奈川県青木山本覚寺) (4)横浜名所等絵葉書15点 (鎌倉市宮村一男氏) (5)大横浜名所絵葉書1点 (岐阜県加茂郡井戸敏蔵氏) (6)横浜市役所等絵葉書9点 (中区新山下庄堂修氏) (7)大震災惨状等絵葉書30点 (相模原市宮本清氏) (8)日本郵船乗船記念等絵葉書11点

▼出版物 (1)『横浜開港資料館紀要第2号』(横浜開港資料館総合案内) 一、〇〇〇円 (2)新版『横浜開港資料館』

▼閲覧可能複製資料 (1)英字新聞『THE JAPAN TIMES』1865-66 『THE JAPAN TIMES DAILY ADVERTISER』1865-66 『THE JAPAN TIMES OVERLAND MAIL』1868-69 (2)生糸商標

(9)米国艦隊歓迎記念等絵葉書19点 (藤沢市伊谷ノ子氏) (10)関東大震災被害記録写真15点 (南区井戸ヶ谷上町野間公平氏) (11)ペドラー・コレクション追加絵葉書94点(寄託) (イギリス ニール・ペドラー氏) (12)関東大震災被害写真10点 (清水市近藤さきのえ氏)

▼寄贈資料(七月~九月) (1)横須賀製鉄所製六角煉瓦1点 (東京都大田区大槻貞一氏) (2)灯台用竹内仙太郎製造煉瓦1点 (三重県志摩郡竹内富士雄氏) (3)本覚寺山門木彫彫刻一対2点 (神奈川県青木山本覚寺) (4)横浜名所等絵葉書15点 (鎌倉市宮村一男氏) (5)大横浜名所絵葉書1点 (岐阜県加茂郡井戸敏蔵氏) (6)横浜市役所等絵葉書9点 (中区新山下庄堂修氏) (7)大震災惨状等絵葉書30点 (相模原市宮本清氏) (8)日本郵船乗船記念等絵葉書11点